

万葉思^{しの}ひ草 十

—若草、和草幻想—

升 田 淑 子

古代の人々は、生命・時間・力などのような神秘的抽象的な事象を具体的な形にして掴み実感し得た。それは表現世界を露わにすることであり、そこに言葉は輝きを放ち始める。たとえば「心」「いのち」には「たまきはる」という枕詞を冠して、「心」「いのち」を具象的に鮮明に実感していたはずである。それ故、「たまきはる命は棄てつ」(巻十一—二五三—)、「たまきはる命も知らず」(同二三七四—)、「たまきはる命に向ひ」(巻八—一四五五—)という表現が可能なのであり、また、「たまきはる 幾代経にけむ」(巻十七—四〇〇三—)のような、枕詞による被枕詞表意の表現にたどりつくのであろうと思われる。枕詞は、言葉によって形成される表現行為の核となつて、作品誕生の文学的軌跡を語る。だが時の増埒の中で激しく光るものを感じながらも、それは遠雷の如くにして、今日の我々にはその言葉の新生の響きが届かなくなつてしまつたものも多い。「たまきはる」もその一つである。しかし、歌の中にこの枕詞が無用の語であるという感覚は興きてこない。不思議な古語、倭言葉の力である。「若草の」という枕詞も、こゝうした中の一つである。

「若草の」という、主として「妻(夫)」にかかる枕詞がある。親しく耳馴れた語である故に、辞書で説明する「柔らかくみずみずしいさま」「新鮮でういういしい」(『時代別国語大辞典 上代編』)の意味で充分に理解しているはずであったが、折口信夫をしてしばしば「訣らない」と言わせたように、古代との感覚的な時差がかなりあったことに驚かされる。それは、古代人の、「若草」に対する「いのちの言葉」に近付くのがなかなか難しいということでもあろう。

『万葉集』の「若草の」の例を見ると、「柔らかい」とか「みずみずしい」「新鮮である」という讚美の意味で妻(夫)に冠したと解釈できる歌はそう多くはない。否、むしろ希少かあるいは無に等しいといえる。「若草」という文字から鋭角に入つて来る感覚に安住し続けて来たことに、もう一度向き合いたいという感を抱かされるほどである。

『万葉集』の「若草の」の例は、次のように十四例ある(「ワカクサ」と訓む説のある「青草」は、ここでは除く)。

① 鯨魚取り 淡海の海を 沖放けて 漕ぎ来る船 辺附きて 漕ぎ来る船 沖つ權 いたくな撥ねそ 辺つ權 いたくな撥ね

そ 若草の 夫の 思ふ鳥立つ (巻二一―一五三 天智天皇挽歌 大后御製)

② 秋山の したへる妹 なよ竹の とをよる子らは いかさまに 思ひをれか 栲縄の 長き命を 露こそは 朝に置きて
夕は 消ゆと言へ 霧こそは 夕に立ちて 朝は 失すと言へ 梓弓 音聞くわれも おほに見し 事悔しきを 敷栲の
手枕まきて 剣刀 身に副へ寝けむ 若草の その夫の子は さぶしみか 思ひて寝らむ 悔しみか 思ひ恋ふらむ 時な
らず 過ぎにし子らが 朝霧のごと 夕霧のごと (巻二一―二二七 吉備津采女死時柿本朝臣人麿作歌)

③ 春日すら田に立ち疲る君はかなしも 若草の 嬬無き君が田に立ち疲る (巻七―二二八五)

④ 級照る 片足羽川の さ丹塗の 大橋の上ゆ 紅の 赤裳裾引き 山藍もち 摺れる衣着て ただ独り い渡らす兒は 若
草の 夫かあるらむ 櫃の 実の 独りか寝らむ 問はまくの 欲しき我妹が 家の知らなく (巻九―一七四一 見河内大橋独
去娘子調 高橋虫麿)

⑤ 天の川 白波しのぎ 落ち激つ 早瀬渡りて 若草の 妻が手枕くと 大船の 思ひ憑みて 漕ぎ来らむ その夫の子
が あらたまの 年の緒長く 思ひ来し 恋を尽さむ 七月の 七日の夕は われも悲しも (巻十一―一〇八九)

⑥ 天にある一つ棚橋いかにか行かむ 若草の妻がりといはば足莊殿せむ (巻十一―一三六一)

⑦ 若草の 新手枕を 枕き初めて 夜をや隔てむ 憎くあらなくに (巻十一―二五四)

⑧ 磯城島の 日本の 国に 人多に 満ちてあれども 藤波の 思ひ纏はり 若草の 思ひつきにし 君が目に 恋ひや明かさ
む 長きこの夜を (巻十三―三二四八)

⑨ 鳥が音の きこゆる海に 高山を 障になして 沖つ藻を 枕になし 蛾羽の 衣だに着ずに 鯨魚取り 海の浜辺に う
らもなく 宿れる人は 母父に 愛子にかあらむ 若草の 妻かありけむ (巻十三―三三三六)

⑩ 恐きや 神の渡の 重浪の 寄する浜辺に 高山を 隔に置きて 沖つ藻を 枕に纏きて うらも無く 偃せる君は
母父の 愛子にもあらむ 若草の 妻もあるらむ (巻十三―三三三九 備後国神嶋浜調使首見屍作歌)

⑪ 青丹よし 奈良を来離れ 天離る 鄙にはあれど わが背子を 見つし居れば 思ひ遣る 事もありしを 大君の 命畏
み 食す国の 事取り持ちて 若草の 脚帯手装り 群鳥の 朝立ち去なば (巻十七―四〇〇八 忽見入京述懐之作 大伴
池主)

⑫ 鶏が鳴く 東男は 出で向ひ 顧みせずて 勇みたる 猛き軍卒と 勞ぎ給ひ 任のまにまに たらちねの 母が目離
れて 若草の 妻をも枕かず (巻二十一―四三三二 追痛防人悲別之心作 大伴家持)

⑬ 大君の 命畏み 妻別れ 悲しくはあれど 大夫の 情ふり起し とり装ひ 門出をすれば たらちねの 母かき撫で 若

草の 妻は取り付き——(卷二十一—四三九八 為防人情陳思作 大伴家持)

⑭ ——若草の 妻も子どもも 遠近に 多に囲み居 春鳥の 声の吟ひ 白袴の 袖泣き濡らし——(卷二十一—四四〇八 陳防 人悲別之情歌 大伴家持)

以上、「若草の」の例を巻順に並べたものであるが、これらを被枕の対象別に整理してみると、次のように分類することができる。

A群 「夫」にかかるもの

①②④

B群 「妻」にかかるもの

③⑤⑥⑨⑩⑫⑬⑭

C群 その他にかかるもの

⑦⑧⑪

「夫」にかかるA群の三例は、作者が①倭太后(天智天皇皇后)、②柿本人麿、④高橋虫麿と明らかで、しかもその顔触れから、この枕詞の使用確度の高さがうかがわれる。B群の「妻」にかかる八例の内、⑫⑬⑭は大伴家持が防人に寄せて作った同一主題の歌である。そこに「若草の妻」の使用上に何らかの意図的な積義が働いていたのではないかと思わせるものがあるが、他の五例は全て作者不明のいわゆる民謡であったり、卷十三というテキストの性質を持った長歌集であったりする。この内⑤は七夕伝説を詠んだ歌、そして⑥も七夕伝説が発想基盤にあると見ることが出来、これも「若草の」が何か特別な意味あいを含み持っていたような感を抱かせる。C群は「妻(夫)」以外にかけられた例で、⑦は「新手枕」、⑧は「思ひつきにし」、⑩は「脚帯」ないしは「脚帯手装り」を呼び起している。いずれも「妻(夫)」を直接被枕詞としていないことは明瞭であるが、「新手枕」は諸説の通り新婚当夜をかざる語であろうから、間接的には「妻」を指し、民謡として共有される。⑪大伴池主の「脚帯手装り」は、「あゆみ」だけにかかるとする説もあるが、「草深野」「草深百合」「夕浪千鳥」などの万葉特有の造語と同様の機能をこの語に見ると、中西進氏の「若草(のような妻)の(手になる)脚帯手装り」(講談社文庫本『万葉集全訳注原文付』)と解するのが自然であり、間接的に、大伴家持の妻坂上大嬢を指していることになる。⑧の「思ひつきにし」について土屋文明氏は「若草の緑の色の衣に染みつきやすい」ところから、「心にしみついて思う。」(『万葉集私注』)、沢瀉久孝氏は「若草のなよびかな姿に思ひつくとかける」として、「若草のやうに、心惹かれた」(『万葉集注釈』)と訳す。中西進氏も「目に鮮かな様を「つく」に接続」するとして、「若草のやうに

思いが離れない」(前掲書)とする。「古義」は「若草の」を一句置いた「君」にかかると見ており、武田祐吉氏は疑問を残しながらもこの解釈に関心を示している(『万葉集全註』)。この歌は「藤波の」と「若草の」とが対となって共に妻の心的状態にかかわりながら、「君」の姿がいかに胸を強く打って心を波立たせているかを表現している。したがって『古義』が直截的な解をとったように見てよいと考えられ、「藤波の」との対による「若草の」にはすでに「妻(夫)」の觀念が入っており、むしろ作者の波動する熱い恋情のひろがり表現として可能となっている。

枕詞「若草の」の意味は、古代語は『万葉集』に学べといった契沖が『冠辞考』の中で言う、「春のわか草は愛らしくうつくしまる物なれば、夫婦に譬たり」によるところが大きい。ちなみにC群の「新手枕」については、若草は「ひしき草」なのでこのようにつけたとし、「思ひつきにし」については、「若草の如くうつくしみ」という意で続いたと述べている。この讚意の籠った語は美しく、爽やかな若い生命が漲っているようである。しかし折口信夫は『万葉集辞典』の中で次のように説明し、「若草の」の古代的眞意がまだ充分には通じてこないことを示唆している。

うぶくしく、愛らしい妻を、嫩草を以て形容したのか。或は爪・摘むなどに関係があるか。或は若草の食用にする部分を特につまと言うた事、さいたづまの如きか。但、つまは、単に妻ばかりでなく、夫をもさして言ふ。又、同音を繰りかへして、わかを起して、卷十六「射ゆ鹿をつなぐ川辺の和草の身の若可倍にさ寝し子らはも(三八七四)。あゆひとかけるのは、若草を結ぶと言ふ処から、ゆひを起したか。或はいちひなどを以て行纏を作ること、和名抄にも見えるから、若草の足結ひとかけたものか。卷十七「和可久佐能安由比多豆久利(四〇〇八)。若から新を聯想したから、或は若草で枕をあむと言ふので、にひたまくらとつづけたものか。卷十一「若草乃新手枕をまきそめて、夜をや隔てむ。憎く、あらなくに(二五四二)。又、卷十三「藤なみの思ひまつはし、若草の思就西(三三四八)」と言ふは、つくにかゝつてある様に見えるが、よくは訣らぬ。但、つくは絡みつくなどのつくか。

以上に見るように、本稿で分類したA・B・C群全てを見通す説明がなされて、しかも、一項一項が断定しない語形で結ばれていて、折口信夫にして難解であったことを物語る。「若草の」の枕詞は、後世「妻」にかかるのが普通となるが、折口信夫は『伊勢物語』の中の「むさしのはけふはなやきそわかくさのつまもこもり我もこもり」の語釈で、二葉の揃っているのをいっているのだと思うといいつつ、「わかくさは、つまの枕詞で、意味は訣らない。」としている(『伊勢物語私記』「折口信夫全集第十卷」所収)。「若草」が、初々しい美しさからだけでは古代人の表現領域に達し得ないことを見通しているのか、折口のこの揺れは興味深い。

ここで再び『万葉集』の用例を眺め直してみることにする。すると、その全てが固有の実態を持たない「妻(夫)」であることに気付く。それは、死・旅・伝説といった素材が自ずと選択されることにも帰属し、きわめて特殊な世界を形成している。『万葉集』十四例の作者と「若草の」と歌われた対象を整理すると次のようになる。

- ① 倭太后 ↓ 崩御した天智天皇
- ② 柿本人麿 ↓ 亡吉備津采女の夫
- ③ 作者不明(民謡) ↓ 君がまだ偶せぬ妻
- ④ 高橋虫麿 ↓ 大橋を一人行く娘子の仮想の夫
- ⑤ 作者不明 ↓ 七夕伝説の織女
- ⑥ 作者不明(民謡) ↓ 七夕・織女を想定
- ⑦ 作者不明(民謡) ↓ 「新手枕」。夜を隔てて会えない妻
- ⑧ 作者不明 ↓ 「思ひつきにし」。会えない夫
- ⑨ 作者不明 ↓ 行路死人の妻
- ⑩ 調使首 ↓ 行路死人の妻
- ⑪ 大伴池主 ↓ 「脚帯手装り」。大伴家持の妻坂上大嬢を想定
- ⑫ 大伴家持 ↓ 防人の妻を想定
- ⑬ 大伴家持 ↓ 防人の妻を想定
- ⑭ 大伴家持 ↓ 防人の妻を想定

右の内、②③④⑨⑩⑫⑬⑭の八例は、歌の主人公に対して妻(夫)は仮想された存在として文学的に与しており、死や長途の旅による悲劇的な物語的要素を背景に持つ。④は伝説的な趣をもつもので、これら全てはきわめて実態に乏しいという特色に収斂される。十四首の内八首というこの数字は、自分の妻(夫)を「若草の妻(夫)」と歌う例が①のみであるのと対照的で、「若草の」という枕詞の意味が通説とは異なる方向へ強い牽引力で動き始めるのを感じる。それは実態がないということとも相俟って、現実と隔絶した世界で光彩を放つ幻影的な妻(夫)の姿へと「若草の」の意味が瓦解して行く。

①を含む残りの六首については、以下のように見ることができよう。①は夫婦であった太后と天智天皇が、うつせみの世と天上界とに久遠の別離をした今、二人の間に立ちただかる時空の隔たりは越え難いものとして太后を悲傷させる。ここでは「若草の

夫」は、艶やかな生命力に満ちた春の草よりも、もっと茫漠とした面影を持つのである。⑤⑥は七夕伝説のいわゆる星合いという現実を離れた世界にその発想を委ねており、二星の間の距離は悠久の時を刻み続ける。⑦⑧は民謡として、いわば不特定に存在する妻（夫）である。⑦は「新手电」といって新婚の妻を暗示しており、それは、どうして夜を隔てて会えないでいられようかと歌う、逆説的な哀歌である。⑧は大伴池主が税帳使として一時帰京する大伴家持へ贈った歌であるが、この中の「若草の」は婉曲的に坂上大嬢を指すと考えられるが、直接かかっているわけではない。池主の表現世界には「妻が、京へ旅立つ夫の脚帯を、魂を込めて手作りして着けた……その妻による手装いの脚帯」という語り風な言葉が凝縮されて、「若草の 脚帯手装り」となったと考えることができる。しかしこれは、家持が身につける旅装束の「脚帯手装り」を結う妻が実態を持って全面に押し出されているというものではない。以上六首にはこのように前八首と同様の要素を含んで現実感・実態感のない妻（夫）が居る。それ故、物語り風な構想が生きてくることになる。七夕伝説は、高橋虫麿の大橋の上に行く娘と相通じ、池主の歌は行路・防人の旅と主題を等しくする。

『万葉集』の「若草の」は、死、旅そして伝説という輪郭のおぼろげなきわめて不安定な世界に浮かび上る幻影に満ち、それは望洋とした原に生える草々のように、群成し、愁の風にただよう黎庶の趣がある。集中屈指の枕詞多用者であり、新しい枕詞を多く創作した柿本人麿の歌には、「妻」に「若草の」をかけた例が一首も見当らない。女性を多く物語歌の題材にとった高橋虫麿にも見出せない。人麿は妻を描くのに波間に漂い寄せる藻を歌い、虫麿はその容姿、身なりを歌う。二人にとって「妻（妹）」は実態を持って輝く存在であり「妻（妹）」の具体性豊かな描写に、「若草の」という枕詞を取り入れることはなかった。

『古事記』『日本書紀』に見える「若草の」は、記歌謡の八千矛神と須勢理姫に一例ずつ、『日本書紀』仁賢天皇紀文中にもその例がある。

古事記

- (1) 群鳥の 我が群れ往なば 引け鳥の 我が引け往なば 泣かじとは 汝は云ふとも 山処の 一本薄 項傾し 汝が泣かさまく 朝雨の 霧に立たむぞ 若草の 妻の命
- (2) 八千矛の 神の命や 吾が大国主 汝こそは 男にいませば うち廻る 島の埼々 かき廻る 磯の埼落ちず 若草の 妻持たせらめ 吾はもよ 女にしあれば 汝を置いて 男は無し 汝を置いて 夫はなし——
- 右の二首は、后須勢理姫の嫉妬の激しさに閉口した八千矛神が、大和に上るといって出発する時、二神の間で交わされた歌謡である。

(1)は八千矛神から須勢理姫に贈った歌謡で、自分がでかけてしまったら、健気に泣かないとは言っているが、山の麓の一本薄のようにうなだれて泣くでしょうねという意であるが、この最後に「若草の 妻の命」と呼びかけているが、これまでに見られなかった唯一の、自分の妻に直接冠した例である。この歌謡の場合の「若草」には、新鮮で初々しく、萌え出たばかりの春草を想定しても間違いなさそうである。しかし、その前に置かれている「山処の 一本薄」「朝雨の 霧に立たむぞ」と一円の中に置いて考えた時、そこに見えてくるのは山野の風景であり、「若草の」は、須勢理姫を野の薄原に立たせた幻影的な光景となる。このようにあるのは、歌謡の内容に旅の視点が大きく関わっているからではなからうか。

(2)は、右の(1)に答えた須勢理姫の歌謡で、この中にいう「若草の妻」は、八千矛神の旅の先々に「うち廻る 島の埼々 かき廻る 磯の埼落ちず」に持つであろう妻を指しており、すこぶる不安定な妻たちである。須勢理姫は「吾はもよ 女にしあれば」と夫と対峙しながら「若草の妻」達と一線を画し、特定しない野の草々に対して正妻である我が身を「女」と明言する。その力強い発語の陰で、「若草の」の性質が、微妙な儂さ脆さを露呈しながらその輪郭を臙に翳めて行く。『万葉集』の、「——着き給はむ 島の崎崎 寄り賜はむ 磯の崎崎——」(巻六—一〇二二 土佐国配流の石上乙磨の妻の歌)という表現には、須勢理姫の歌謡の様式が旅の歌の様式となって語り継がれていたことを暗示させるものがある。そして、古来、まず神々の巡行から物語化されてくる他国の女達の姿が垣間見られるであろう。

『日本書紀』仁賢天皇八年是秋の条に、高麗国に使用する日鷹吉士の従者鹿寸とその妻飽田女にまつわる話がある。鹿寸出立の後、この女性が難波津で「母にも兄、吾にも兄。弱草の吾が夫何怜」と嘆じた。この「弱草」を紀注には「夫婦に喩ふるを謂ふ。」と記している。『万葉集』に「弱薦」の表記はあっても「弱草」の例はないが、飽田女の「弱草の夫」は、紀注からだけでは解けきれない複雑な人間関係から吐露された情念がある。これを、「若草の」と置きかえて、みずみずしい生命力溢れる夫という讃辞には読み取れないであろう。「弱」には、か弱い、か細い、もろい等の他に、遠い所の意がある。『日本書紀』垂仁天皇九十九年、常世国から時じくの香菓を持ち帰った田道間守の言葉に、「命を天朝に受りて、遠くより絶滅に往る。万里浪を踏みて、遙に弱水を渡る。」とある。「弱水」は中国の川の固有名詞で、特に崑崙山にある「弱水」が有名であるが、他方、「弱水、謂西域絶遠之水」(『漢書 司馬相如伝第二十七下』顔師古注)のように遠くはるかな(河川)の意があり、垂仁紀の「弱水」は後者の意である。

「若草の」は、遠く古い昔、古代の人々がその意味の明らかかな内に妻(夫)に定位させた重い語であったようだ。語りの中の「若草の妻(夫)」のありようは、幻想的な紗幕の彼方に臙に見え、その面輪には哀しみの笑みを湛えて、佇んでいる。

(ますだ よしこ 日本語日本文学科)